

天眼鏡

## 新型コロナと畜産

春爛漫を迎えているというのに、気持ちが晴れない毎日だ。新型コロナウイルス感染症が中国の武漢で発生した当初は中国の話し、他人事であったものが、イタリアに拡散した頃から”風景“が変わってきた。イタリアでは感染拡大が急で感染者数が多いだけでなく、致死率は10%前後。医療崩壊にとどまらず死亡者の埋葬が追い付かず遺体のまま放置されているものもあるとの報道に、一気に他人事から自分事に転換してしまった感がある。

学校の休止、工場閉鎖、在宅勤務、さらには外出自粛で日常生活は一変。個人的にも、会議等での外出は減って、自宅にいる時間が増え、このところ近くの小金井公園を散歩するのが日課となりつつある。また飲み会はなくなり、家での晩酌のみ。夜遅くの帰宅もなく、また支出も抑制され、生活の健全化が進みつつある。しかしながら世間を見渡してみれば、消費需要の大幅減退にともなう経済へのダメージは甚大で、リーマンショックをはるかに上回る経済対策を余儀なくされている。とはいえ感染はまだピークには達したわけではなく、先行きが見通せないだけにさらに不安は募るばかりだ。

本誌の読者は、こうした事態をどのように受け止め、感じておられるであろうか。新型コロナ騒ぎが発生する直前まで、豚コレラが大きな問題となっていてんやわんやの大騒動であった。これが新型コロナ騒ぎですっかり吹っ飛んでしまったが、果たしてその後、豚コレラの状態がどうなっているのか心配でもある。

畜産の歴史は、口蹄疫、BSE、高病原性鳥インフルエンザ、ヨネ病そして豚コレラと、まさに伝染病との戦いの歴史でもあり、防疫対策が連綿として積み上げられてきた。かつては豚舎等を見学することができたが、防疫対策から、最近では現場を訪問しても話を聞かせてもらうだけで、見学は難しくなってしまった。

2001年の話しであるが、デンマークに出かけて養豚

農家を見学した際、デンマークに入学して何日目かをチェックされたが、先にヨーロッパに入り、確か前々日にコペンハーゲンで合流した仲間ははじかれて豚舎の見学ができなかったことがあった。当時はずいぶんデンマークでは厳格な管理がなされていると感じたが、今では常識であるだけでなく、もっと厳しい管理が徹底されているのであろう。防疫対策は家畜伝染病といったちごっこを繰り返してきたわけだが、今後とも発生する家畜伝染病に防疫対策が追いつき、両者のバランスを維持して畜産を発展させていくことができるか、不安は隠せない。いろいろとその理由がある中で、特に気になるのがグローバル化のとめどない流れとともに地球温暖化である。

グローバル化についてはあらためて述べるまでもないが、人だけでなく、船等の行き来がさらに頻繁になる中で小動物の侵入を完全に阻止していくことは難しい。そしてさらに困難であるのが地球温暖化への対応である。IPCC（国連気候変動に関する政府間パネル）は2030年から2052年の間に世界の気温が産業革命前の水準より1.5度高くなる可能性が高いとの試算とともに、この1.5度を突破してしまえば歯止めの効かない温暖化が進行しかねないとの警告を発している。温室効果ガス発生抑制のための国際協議は難航しており、さらなる温暖化は避けがたい情勢にある。人間の場合、温暖化によって蚊に媒介されるマalaria、デング熱、日本脳炎等の増加が懸念されているが、病原体の自然宿主や媒介動物の数が増加していくことは必至であり、畜産への影響も避けられないのではないか。

今回のコロナ騒ぎが、先行きの社会や経済、農業や畜産のあり方を考えるいいきっかけになってくれることを祈るばかりである。（4月4日現在）

（農的社会デザイン研究所 蔦谷 栄一）